

# sponge architecture

都市の壁となった中高層建築の解体と再構築



## examination

「ガワ」と「アン」



「アン」の建築…地域性を見つけるためのカタチを取り出す



## 講評

日本の都市空間の特徴に「ガワ」と「アン」による構成があげられる。用途地域において、幹線道路に面する一皮分がその内側より高い建蔽率・容積率が付与される。都心にあっては許容容積率を最大限に活かした中高層建築が建てられ、中高層階はほとんどオフィス・集合住宅で占められている。一方、幹線道路から一皮内側に入ると、そこには生活感のあふれる住宅地が広がっている。

このような東京の典型的な風景に対して、「内側は生活感が滲み出したヒューマン・スケールをもった住宅地なのに、外側の幹線道路

に面した中高層建築は無表情で何も伝えない壁のようだ」と感じたところからこの設計はスタートしている。都市の壁を解体し再構築するにあたり選んだキーワードが「浸透性」と「ローカリティ」である。無表情な壁に「浸透性」をもたせ、住まう人の生活感や「アン」の「ローカリティ」を滲み出させることを目標としている。

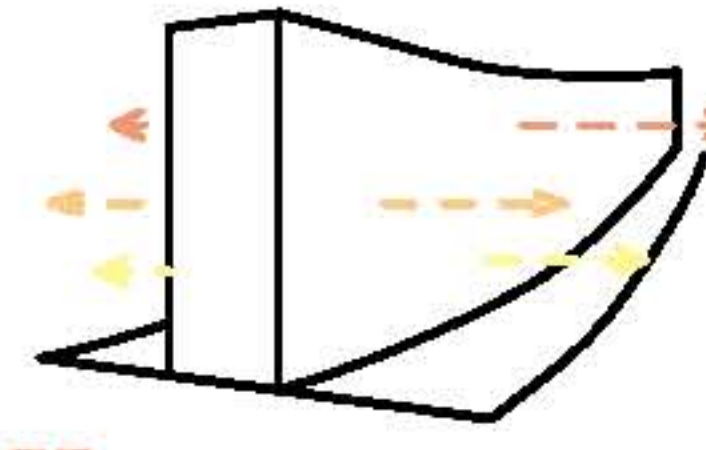
「浸透性」を建築化するために以下の4つの手法が説明されている。1.「生活がにじみ出るように」プログラムとして「仕事場のある家

## concept

経済中心となって高い供給の中建てられてきた建築に地域らしさを導入することで「都市は人が住まう場所」ということを考えさせられる建築があったなら。

建築がただの固体ではなく、まわりを吸収し、まわりに放出するスポンジのような柔軟性のある表面のあり方があるのではないだろうか。

薄い壁やただ通過できるだけの浸透性ではない複雑に絡まる生活行為とその行為をうながす建築によって内部にも外部にも影響力のある建築を目指す。



## design

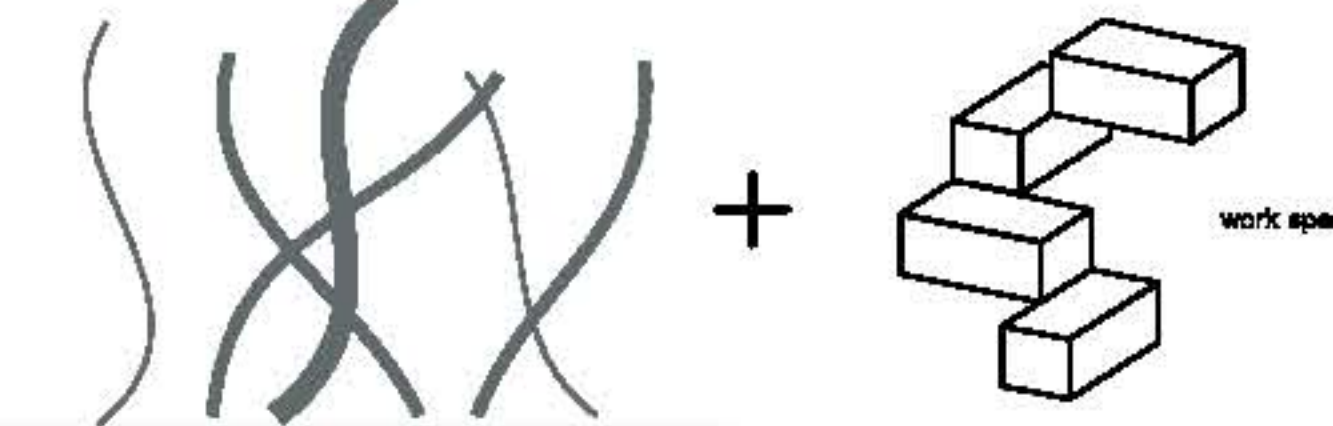
浸透性のある建築・複雑形態から生まれる浸透性

a) 生活風景がにじみ出るように…仕事場のある家



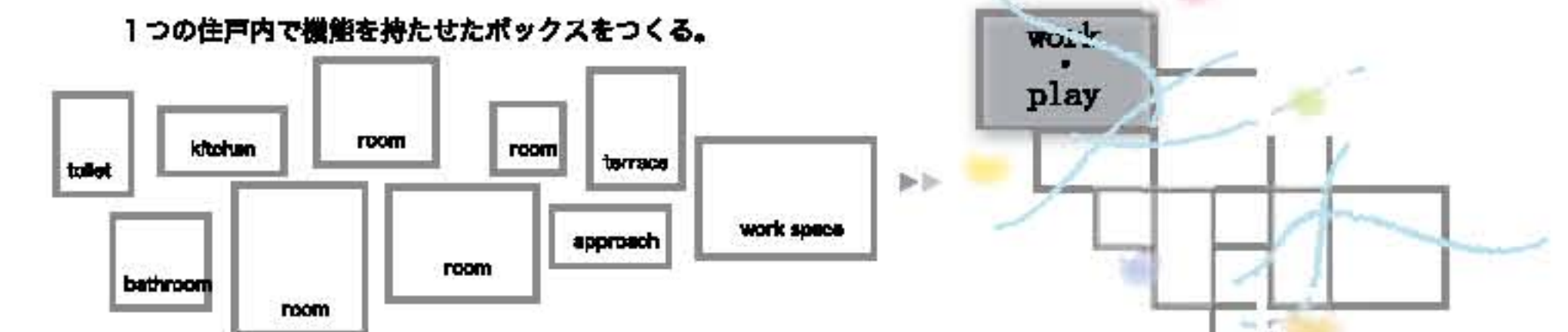
建物全体がいつも人々の生活行為で満たされてほしい。そこで、「生活感のにじみ出る建築」の第一歩としてどの住宅も仕事場が敷とつながっているプログラムとする。西麻布の住宅地にもいくつか見られる店舗は住宅に併設されているため、このプログラムの引継ぎによってこの地域特有の空間形態を導き出す。

c) 動いているように・多シーン化…水平・垂直軸をぶらしながら積層する



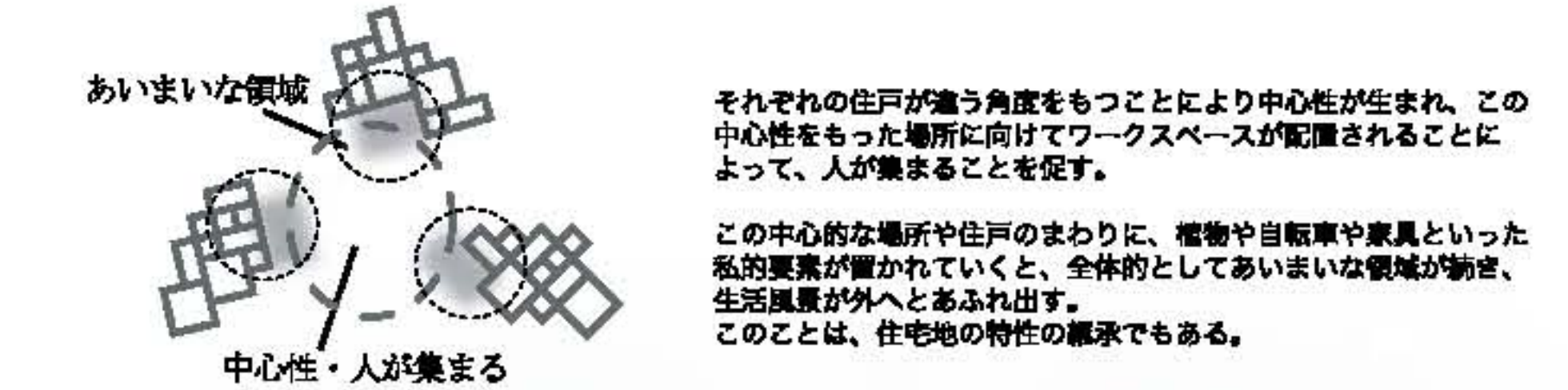
b) のずらしを活用しながら、ワークスペースが必ず下の階と重ならない位置で90度の回転を加えながら上層を重ねていく。このことで立面上では垂直のラインが減少し開口を多く生み出すので、奥の住戸まで立面上に出現する。空間が多いことで、視線、音、におい、色が様々な方向にまわっているより多くの生活シーンが建築の外へあふれてゆく。

b) 外部との融合…ずらしでくっつける



それぞれのボックスをワークスペースの依りかたで動かしながら配置する。ずらしながら配置していくことで外部との接面を多くし、1つの住戸内で様々なシーンを生み出す。家の中からは多方向の景色が見え、外部には様々な生活シーンがもたれていく。

d) 集まりを生む…中心性・交点をつくる



それぞれの住戸が違う角度をもつことにより中心性が生まれ、この中心性をもった場所に向けてワークスペースが配置されることにより、人が集まることを促す。この中心性をもった場所や住戸のまわりに、植物や自転車や家具といった私的要素が置かれていくと、全体的としてあいまいな領域が動き、生活風景が外へあふれ出す。このことは、住宅地の特性の継承でもある。

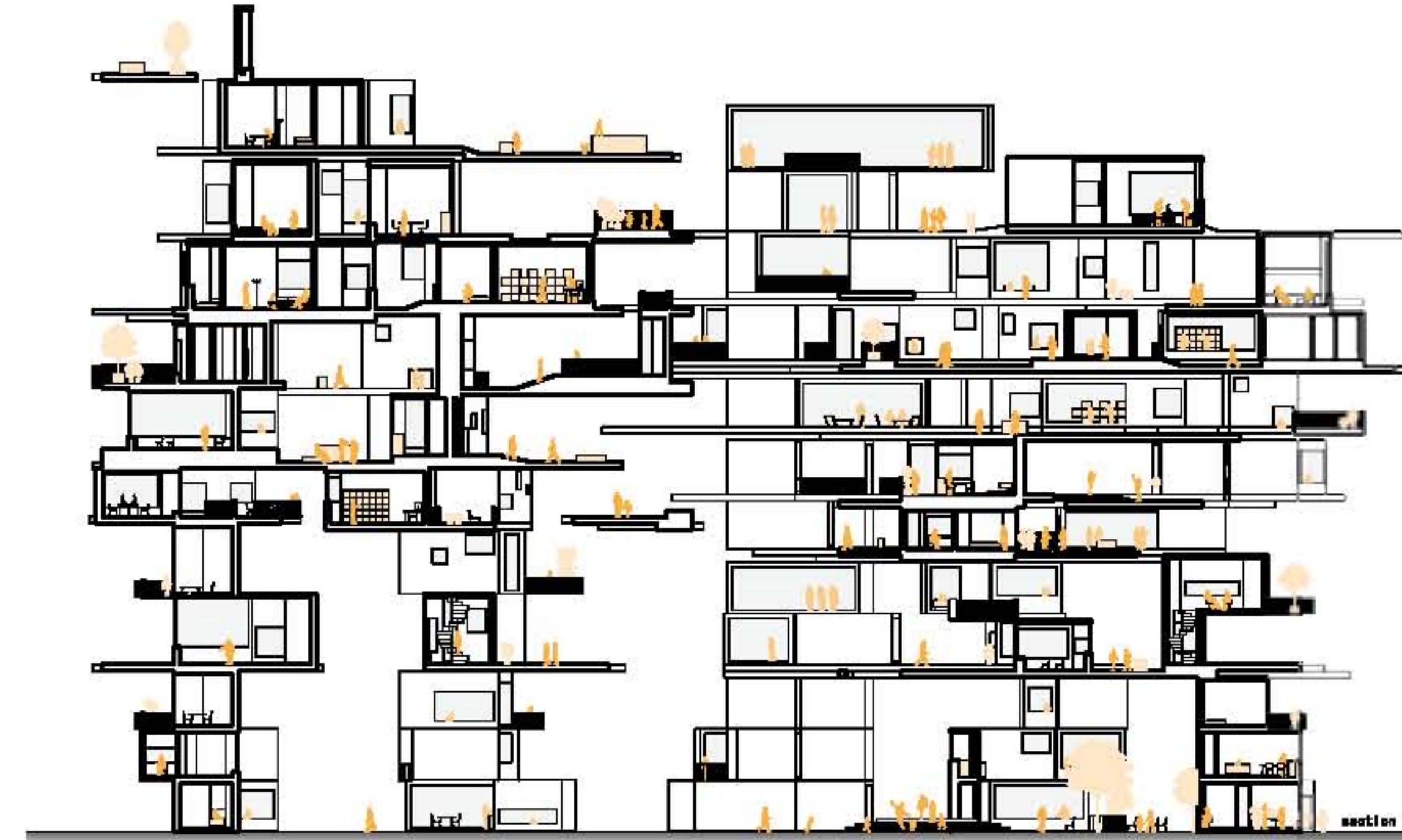
ローカルであること

a) アン(西麻布の住宅地)の特性の引継ぎ…道の構成・他住戸との関係性

住宅地の開口位置のとり方や平面構成は、隣地との関係によって決定されているのが特徴である。また、様々な交差する道やその高低差も特徴である。(前記アイコン)

b) 運動すること…壁と家具・家具と開口・開口と隣家

300mmの厚さは開口の部分で同時にくっつきやすいといった家具の役割を果たす。また、人の行為を促す家具の一部を建築に埋め込むことで、建築全体を生活行為と連動したものにす。



するボックスをずらしながら配置している。この操作により住戸と外部の接触面(外壁長)が大きくなる。3.「動いているように」軸をずらしながら積層させていく。これは無表情な都市の壁の要因が垂直方向の直線性にあると考えたからである。4. 公私の曖昧な領域を挟んで「集まりを生む」ことが意図されている。住戸を取り囲む曖昧な領域ごと積層させているところに建築構成上の特徴となっている。つまり、戸建て住宅を敷地ごと回転させながらあるリズムをもって積み上げたような構成となっている。

中高層集合住宅の空間の質を高めること、特に周辺都市環境との接続のさせ方は都市建築の大きな課題であるが、構造や日照など中高層ならではの難しい問題もついてくる。豊田さんはこの難しい課題に対して逃げないで真正面から取り組み、建築化する手法の提案につなげており、その構築力は見事である。また、「ローカリティ」を実現するため、対象敷地を含む地区に対して丁寧なフィールドワークを行っている。その地道な作業も本案に実行きをもたせる結果となっており評価したい。